

具有するものと云へないと云ふのであるが其後に出て来た學者が調べて見ると、ルボックが根底とした材料に誤謬が発見されました。其はルボックは各地を旅行した旅行者の報告を基礎として書いたもので専ら基督教の宣教師などから得た材料でありましたが、それが間違つて居りました。後の學者が調べるとそれ等の人種の中にも正に宗教的言語があつたのであります。只信念の程度が異つてゐるだけであつたのであります。其後の學者は凡ての人類は生れながらにして信仰能力を有つてゐる。即ち宗教的動物であると云ふことを證明したのであります。

古の人間
も宗教を
有したる

先づ現代に於ては然りとして、然らば古の人間はどうであつたかと云ふと、これは考古學者の發掘した物によつて古の人間も宗教を所有してゐたことが解りました。近頃のことでありますが、今戦争最中の白耳義のシャルローと云

人間の性
を唯一の
特徴とし

ふ地方にこれを證明する所の發掘物を得たのであります、それは古い石器時代の地層の中から一つの石器を見出したのであります。その骨は古の人種が神として拜んだもので、即ち古は庶物崇拜と云ふ宗教をもつて居りました。これは決して珍らしくないことで、現に今日阿米利加に於けるインディアンの中にもこれを認めるのであります。又極く古い時代のミイラからも出て來ました。それは掌のなかにさう云ふ動物の骨を握らせて置く、即ち身を護る神として持たせて置くのであります。時代から考へて見ても場所から考へて見ても、凡ての人類は宗教を有つて居ります。尤も高い宗教低い宗教と云ふ區別はあります。宗教をもたぬものは皆無と云ふ結論に到着するのであります。

然るに現代に「我は無宗教なり」などと誇るものあるに至つては、沙汰の限りであります。寧ろ宗教は人間の性格を現はす所の唯一の符合で宗教的動物であると云ふことが人間の自慢であり、萬物の靈長たる

佛敎人生觀
 所以であつて、この特徴を人間から奪ひ取つたなら人間の資格を消滅する譯になるのであります。他の動物にはこれ程高尚なものはない智識だけでは人間としての特種の性格を現すものではありませぬ。これは人間に限らず他の動物にも智識のあるものは少なくないからであります。即ち蜘蛛の如きは幾何學的に網を張つてゐるあの角度は餘程組織的な智識を要するのであります。蜂の巢の如きも中々巧く調和を取つて造つてあります。殊に象の如きは頗る伶俐で、人の言語を理解して種々の藝を演ずる。されば智慧だけでは人間の符合にはならないけれども宗教心のみは人間固有の性格であります。然るに「無神論者なり」などと自ら誇稱する者は自ら進んで人間の資格を亡ぼすもので、西洋にては極力之を排斥するにも拘らず、日本に於て却て宗教を罵る者あるは實に概嘆に堪へぬ次第であります。扱て人類が生來固有の能力としてこれを有するものとすれば、日本の祖先

も必ずやこれを有つてゐたには相違ないのであります。此の日本の祖先より従来より存在したりし宗教的信念と佛敎とは程よく調和融合して、此處に今日の日本國民の信仰と云ふものが出来て居るのであります。是れが日本佛敎の特色で、また佛敎の融化力を表示して居る處なのであります。

五 日本佛敎の世界敎的可能性

(一) 先づ大疑團を起せ 是れ佛敎初入の門

我が日本の宗教は、先祖代々上天皇陛下より下は吾々臣民に至るまで皆共に信仰し來つた佛敎でありまして、其の佛敎は學問を基礎として出來た宗教でありますから、一方面から見ると極めて高尚な複雑な學問であると同時に又他面から見ますと極めて單純な宗教とな

信する
事なり
は疑はぬ

つて仕舞ふのであります。

然るに今日では社會から佛教といふものは宗教一片のものゝやうに思はれて居る。説教講話などの上で南無阿彌陀佛とか南無妙法蓮華經とかいふやうなことは唯信心といふ一つの上から成り立て行くのであります。即ち其の信するとは疑はぬといふことでありますから兎に角佛が斯様に仰せられた祖師が此くの如く言はれたといへば善くも悪しくもそれに従うて行くのが宗教であると憚う説明をいたしませんと、ところが更に翻つて學問の方からこれを見ますと同じ佛教でありまして、最初から信せよとは申しませぬ。先づ疑を起せと云ふのであります。大疑の下に大悟あり、小疑の下に小悟ありとも申しまして、大きな疑を起さなければ大きな悟りは開けないものであります。

佛教人生觀

心の本體
こそ佛なり

(二) 吾人の心とは畢
竟如何なる物か

私共お互が日用光中思慮分別する心の本體こそ取りも直さず佛であります。其の心とは何物であるぞと先づ大疑團を起す形は丸いか四角か色は緑か赤かこれ何物ぞと疑つてみまするに色にも見えねば形にも現はれませぬ、それを假に心とも名づけまた魂とも申します。要するところ佛の目的は世界の衆生をして悉くこの心を本位に落ちさせたといふより外にありませぬ。謂ゆる世界とはお釋迦様の仰せられました世界でありまして、これはまた馬鹿くしい廣い三千大千世界のことでもあります。

(三) 三千大千世界の面
積は如何程なりや

然らばその三千大千世界といふはどう云ふ世界であるかと申しま

佛敎人生觀
すと此に太陽があります。また太陽に附屬したところの世界が澤山
あります。即ち私共が現在生息して居る此の地球のやうなものは、五
つも六つも太陽に附屬して居るので、これを一組の世界として、これを
千個集めたものを小千世界といふ、即ち小さい千の世界といふことに
なります。

ここで其の小千世界を二つ三つと段々聚めましたのが中千世界で、
その中千世界を更に千あつめたのが大千世界と云ふのでありまして、
斯くの如く小千中千大千であるに依て三千世界といひ、此の三千世界
を一佛土といふのであります。

また極樂淨土とは、此の三千大千世界を十萬億隔てた西と申します
から、これまたなかく、遠方のことを云うたものであります。これは
機に説いたものでありまして、更に縦から云へば五百塵刹却と云ふ話
もありますが、今は且く措きます。

さてそれ程限りのない世界でありますから、従つて時間にも限り
がありません。また空間にも限りがありません。此の限りもない時間
空間に於て現はれてゐる一切の事々物々は、其の現はれて來た理由が
なければなりません。唯これが自然に現はれたとは許されぬのであ
ります。

(四) 萬象の生起する
原由は奈何??

彼の耶蘇敎のやうに、エホバの神があつて、それが造つたとも信じら
れませぬ。例へば此に一個の茶碗があります。此の茶碗は一體どう
して出來たのであるか、出來るには出來る前の時間があつたに相違あ
りませぬ。その前の時間はすでに過ぎ去つて時間であります。から
これを名けて「過去」と申します。その過去といふ時間があつたから茶
碗も出來たのであります。然らば茶碗が出來てから之を保つ間の時

佛敎人生觀
問即ち此の茶碗の爲には現在であります。更に茶碗が壊れて了つた後の時間はこれ亦限りがありません。即ち未來であります。さて又茶碗といふものが出来るには出来る理由があるであります。さうする前に壊れるには壊るべき理由があるに違ひありません。さうすると前には出来るわけがあつて今出来るのでありますから過去より現在と二世に亘つて居ります。これを二世一重の因果と申すのであります。前に出来るだけの理由があつて出来ましたものならばそれが壊れると云ふ因縁があつて壊れるのでありますから過去現在未來と三世に亘つて過去から現在に一重現在から未來に一重此の間を三世兩重の因果といふのであります。

(五)

三世因果の道理は
味ますこと能はず

天地萬物凡そ此の世の中にありとしあるあらゆる物柄事柄みな悉く

くこの三世因果の道理によつて出来もすれば壊れもする。此の如くすべてのものが皆因果の支配を受けて居りますから佛法ではこの三世因果の道理によつて一切萬物を判断して行くのが佛法の學問の原則であります。然るに是はたゞに佛法のみに限らず今日世間にある如何なる學問と雖も原因結果の規則は味ますことは出来ませぬ。結果あるものは必ず前に原因があります。これは天地間の規則として決して決して味ますことは出来ないと云ふことは今日世間一般の學問で云ふところであります。即ち佛法は世間一般の學問に依つて組み立てられたものであります。然るに一方では何にも分らぬ爺さんでも婆さんでも釋迦如來と同じほどの見識を持ち祖師方と同じ程の安心を得て未來永劫に安樂の境界を得ることが出来るといふのは佛敎はもとより宗敎でありますから斯う云ふ境界を得らるゝのであります。

佛法の信と未信の絶と大隔

元來吾々お互ひ人間の體も因縁順熟して現れて來たところの姿でありまして、また外を見ると梅がある、その梅には梅の因縁があつて梅の花が咲き、梅の匂ひがする、櫻の木がどのやうに功夫をしても、梅の匂を櫻に移すことは出来ませぬ、又さればと云つて櫻の色を梅に移すことも出来ませぬ。酒屋は酒屋、餅屋は餅屋、皆それ／＼で繁昌するのは繁昌するだけの因縁があつて繁昌する。家一軒の上にも於ても其の道理があれば、一國の上にも同じ道理がなければならぬ筈であり、す、即ち謂ゆる萬國に絶へて比類のない皇統連綿たる我が日本帝國の國體が成り立つには、その成り立つ因縁があつて成り立つたのであります。貧富強弱大小是非皆それ／＼こと／＼く因縁があつて今日の果報が現はれてゐるのであります。そこでこの因果の道理が眞實信せられましたならば如何なる一大事が出來したからとて、決して狼狽するといふやうなことはない筈であります。此に於て同じ忠義

忠孝は今世限りには非ず

孝行をするにも、佛法を信じたものゝ忠孝と佛法を知らないものゝ忠孝とは大に異なる所があるのであります。

(六) 日本佛教が世界の 大宗教たる所以

さて一個人には一個人の三世因果があり、家には家の三世因果があり、國となれば國の上に三世因果があります。それ故に佛教は一人一人に用ふれば一人の教となり、一家に用ふれば一家の教となり、之を一國に用ふれば一國の教となるのであります。さてまたこれを手許に引き戻して見ますれば、君臣父子夫婦兄弟といふこと皆過去世の因縁によつて親子ともなれば夫婦ともなつたもので、況んや君へ忠義を盡すといふにも過去現在未來の三世に亘り、親に孝行を盡すといふも此の世限りではありませぬ。生々世々の君臣であり父子であるとしたならば、三世因果の道理を深く信じて、未來永却安らかに生活の出來るや

うに心掛けねばなりません。故に佛教を信する者と信せぬ者とは同じ忠孝の誠を盡す上に於て、非常の相違があるのであります。今その一例を擧げて見ませう。

我が日本の忠臣楠正成公について申して見ますれば、正成公は足利尊氏の軍と戦つて湊川に於て討死をいたしましたけれども、臨終の一言に七度人間に生れて國賊を亡さんと云うたことは、名高い話でありまして、若しや是れが人間は此の世限りで焼けば灰になるか、土になるのか、跡には何も残るものではない、即ち未來とか後生とか云ふものゝあるべき筈はないと云ふ斷見であつたならば、夫の支那四百餘州に古今稀なる忠臣といはれた諸葛亮孔明が謂ゆる

『臣鞠躬盡力死後已』命のあらん限りは御奉公しますけれども、死んでしまへば仕方がないというたと同じであります。

然るに我が楠正成公は七度までも生きかはり、死にかはつて、君のた

楠正成は七生を誓ふ國

多聞丸と禪宗の問答

め國のために御事へ申しますと誓つたのであります。何故に同じ忠臣と稱へられました人でありながら、斯る差別のあるものかといふにいふまでもなく、楠公は佛法の三世因果の道理を篤く信せられた人でありましたから、決して此の世限りの忠義奉公ではありませぬ。生々世々に亘つて忠義を盡すといはれたのであります。

此くの如く佛法を信じた人と信じない人とは、これだけの差別があるものであります。元來楠公は嘗て、その兩親がどうぞ好い子を得たといふので、多聞天に祈誓をこめて出されましたのでありますから、その幼名を多聞丸と申しました。或る時多聞丸が餘處へ行く途中で禪宗の坊さんと道伴になりましたが、幼くても賢い多聞丸のことであり、ますから、うか／＼しては居りませぬ。幸ひ禪宗の坊さんを見ましたので、

『人の心ほど不思議なものはありませんが、心とは全體どんなもので

せう」と訊ねました。するとその坊さんが

「お前の名は何と云はれるか」と反問したので

「はい多聞と申します」と答へた。斯うして二三歩行きかけますと、突然に後から

「多聞殿」と呼びかけられたので

人答への主
なりや誰

「はい」と答へますると

「これ何ぞ」と云はれた。

多聞殿と呼ばれて「はい」と答へたものは何が答へた口が答へたか齒が答へたか喉が答へたか一體何物が答へたのである。心か魂か其の答へたものを今此處へ出して見なさい斯う云はれて多聞殿大いに疑着を起しました。それからといふものは種々と佛法の道理を研究せられました。遂に立派な佛敎信者となり即ち彼の湊川に於て戦死をされたのであります。

(七)

佛法の道德標
準と恩徳報謝

此の如く佛敎の原理は三世因果の道理から成り立つて居て、それが複雑になつては學問となり單純なものとなつては宗教となるのであります。その學問にせよ、宗教にせよ、吾々お互ひ一個人の上の道德となつて現はるゝ時は、果して如何なる姿に現はれるかと申します。即ち佛法の道理は如何にも高尚複雑なものであります。けれども之が社會の道德と現はれた時には、唯々報恩の二字より外にないと云ふことになりません。詳しくは恩徳に報謝するといふより外に佛法の道德の標準はないのであります。

然らば其の報恩とはどう云ふことであるかと追究いたしますれば、長くも先帝明治天皇陛下は、皇訓の上に

「克く忠に克く孝に億兆心を一にして世々厥の美を濟せるはこれ我

が國體の精華にして、敎育の淵源亦實に此に存す』
と仰せられました。其の君には忠親には孝と云ふことが、とりも直さず私共お互ひ先祖代々千三年來信奉し來つた佛敎の根本思想たる報恩と一致することが明かであるのであります。

六 徳川時代と殿堂佛敎

(一) 日本史上に於ける 宗教統一の美點

西洋にも其の國々に依りましては色々の美點を備へて居りまするが、今はその西洋は別として我が日本にもいちゆるしい美點があるのをごさいます。それは唯一の佛敎を以て内而外形共に國民全體の上を支配したといふこと是であります。

日本國民は外形に於て萬世一系の皇室を戴いたと同時に精神的に

は唯一の佛敎を信じたのであつて畢竟宗教の統一が誠に旨く行つた爲に、日本今日の發展を見る事が出来たのであります。

思ふに宗教の統一ほど困難なものはありません。印度支那朝鮮何れにしても宗教の統一が出来ませぬ。出来ないと云ふのは宗教が理窟上のものではなく直ちに感情に關するからであります。例へば眞宗に致しましては西本願寺と東本願寺との本山がありましてなかく、統一がむづかしい然し同じ六ヶ敷いと申しましたも、元來が一宗の本山でありますから中にも統一し易い所があります。けれども國家の宗教統一となりますると宗教各々その出發を異にし其の敎理を異にする故に殊の外統一上困難を生ずるのであります。然るに日本はその困難なる宗教の統一が出来、佛敎が主體となり、神儒二敎は佛敎の寄生蟲として徳川時代に至り三敎一致して國民思想を完全に發達せしめたのであります。

佛教人生觀
此の如き史上の特色があつた故に、歴代の天皇に於かせられましても、御一人として御信仰の御變り遊ばした方がないのであります。朝鮮にしても支那にしても、佛敎を廢して他敎を信じたものであります。變らなかつたと云ふのは偏へに宗敎の統一が與つて力あるのであります。

日本の皇室は血肉上皇統一系でありますと共に、精神上の信仰も又皇統一系であります。此の如き歴史を持つ吾々日本國民は何うしても一致せなければならぬ筈であります。此の芽出度い國風が佛敎渡來即ち推古帝以後千有五百年繼續して今日に至つたのは實に我が國民の光榮であります。

(二) 德川時代三敎分離と儒敎最盛期

從來此の日本佛敎史を研究したのも澤山ありますが、大抵は奈良平安鎌倉時代を研究したに止つて、德川時代は多くの人がこれを閉却したかのやうに思はれます。同じ日本歴史に於てこれを見まするも、德川時代と言へばあらゆる方面に於て最も多く特色を帯びた時代であります。殊にこの時代の佛敎に於ける特色は實に大したもので、吾人のこれを閉却してはならないものが數々あるのであります。今便宜上これを三つに取り纏めてお話を進めやうと思ふのであります。するが最初には神儒佛三敎の上から如何なる特色があつたかを述べて見たいと思ひます。神儒佛の三敎中神道は元來日本固有のものとして見做しまして、佛敎のうちどちらが先に渡つたかと申せば、佛敎が先きで佛敎は後から渡つて來たのであります。然るにどうしたものでか先きに渡つた儒敎よりも後の佛敎の方が不思議にも宗敎界の中心として發展したのであります。宗敎史を見ましても、名は神儒佛の三敎

でありますが眞實は唯一の佛教を以て始終を支配したことは争はない事實であります。

所が此の神儒佛三教一體の宗教が徳川時代に至つてそろく分離して各々獨立的態度を取るに至つたのであります。

さうして種々の葛藤が生じ軋轢が始まつた。向ふから廢佛をすれば、こちらからも勢ひ破邪に出ると云ふことから、宗教の統一が碎けて分立すると同時に國民をして排他心を養成せしめたのです。

其の始めは林羅山本居宣長これ等の人が分立以後の儒者神道家であります。この人々が排他心を以て廢佛をしました爲に、遂に宗教の和合が破れましたことは國家の爲め前途悲しむべき現象であつたのであります。而して儒者には碩學高儒續出し、研究を重ねて日本儒教の最盛時代をなしたのであります。故に徳川時代は儒教の全盛時代であると同時に神道にも平田篤胤の如き人出で、是れが研究を盡さ

れ且つ國學が益々興隆するに至つたのであります。此の如くにして徳川時代は宗教の統一が破れたと同時に、古學者として徂徠とか仁齋とか云ふやふな人々が輩出し、從來日本宗教界の王として國內に敵なかりし佛教が徳川時代に来つて多くの敵を持つやうな事に至つたのであります。

(三) 再び儒教全盛時代と佛教の大勢

次に徳川時代は此の如く分立して儒教には多くの學者輩出して益々研究の歩を進めたに反し、佛教は以前の面影もなく精神的にその活氣を滅殺されたのであります。前期とはちがつて佛教上何等の精神的幸運でも起つては居りませぬ。前期に於ては政治が變化すると同時に新思想が起つてゐる。例へば彼の大化の革新によりまして、政治上の大變化あると同時に、法相三論俱舍成實律華嚴の所謂奈良の六宗

が起つたのであります。此の政治の大變化と共に新信仰が起つたのが奈良佛教の花であります。其の他傳教弘法の偉大なる兩大師が出られると共に天台眞言の新信仰が日本に起つたのは桓武天皇の平安の始めであります。

それから鎌倉時代に至りますると茲に空前絶後の革新が行はれたと同時に新信仰即ち榮西禪師出で、臨濟宗を傳へ、道元禪師出で、曹洞宗を傳へ、聖一國師出づるに及んで三方に新佛教が起つたのであります。而して又法然上人出で、他力教を弘通せらるゝあり、日蓮上人出で、題目を唱導せらるゝあり、此の如く政治の變化あると同時に佛教にも亦新芽を生じ、精神上大に頹廢して居たものが、これ等政治上の變動ある度毎に大抵は復活の機運に及んで居るのであります。

然るに徳川家康が幕府を江戸に開いたのは然かも政治上に於ける空前の大變化でありまして、家康の力によつて天下太平に治つた。同

鎌倉時代の佛教

徳川時代の佛教は物に大なし

じ幕政と雖もこれだけ國家に影響を及ぼしたことは稀であります。多年の戦國悉く鳴りを静め、武全く止んで大に文學が勃興したのであります。然るに文學と相離れざる佛教にも、これに依つて何等の新生命が開けなければならぬのであります。一向開けませぬ。何事の新信仰も起らない。随分多くの人々が輩出したのであります。悲しい哉。前の傳教弘法に比すべき人物が出て参りませぬ。所が儒教の方には雨後の筍の如く陸續として碩學が輩出し、再び儒教の全盛時代を演出したのであります。

この第二の徳川時代に於ける佛教の大勢は即ち益々衰頹の悲運に傾かねばならなかつたのであります。

(四) 徳川的佛教興起と 浄土宗 浄土宗 浄土宗 浄土宗

ではないのであります。成程新思想新信仰は起つては居ないけれども、此處に徳川の佛教が起つて居るからであります。新信仰新宗派が起らなかつたと云ふ點よりすれば、歴史上比較的佛教が退歩したと言ねばなりません。然し必ずしも佛教が退歩して居ない事實があるものであります。

先づ差し當り江戸中心の佛教として淨土宗、鎮西流が大に盛んになつたのであります。今日増上寺、智恩院等の鎮西流の淨土宗は、即ち徳川の方によつて發展したのであります。若し徳川がなかつたならば、或はこの鎮西流も彼の西山流の如く、衰頹の悲境に陥つて居たかも知れませぬ。今日西山流といへば有れども無きが如く、頭で世間の眼中にはないやうな有様であります。然るに徳川家康より八代の間は悉く淨土宗で、然も鎮西流の信者であると共に、悉く又鎮西流の保護家であつたのであります。

天正十一年家康が江戸に幕府を移す以前は、三河の大慈寺が菩提所であつたのであります。江戸城に入るや否や、増上寺の檀越となつて、元麴町にあつたものを芝に移し、東京唯一の偉大なる寺を建立したのであります。此の如くにして江戸唯一の寺が、増上寺、京都唯一の寺が智恩院と云つたやうな有様で、江戸と京都の一番壯觀なる建築は、淨土宗が占めて居たのであります。

のみならず寛永年中三代將軍の時には、日光と上野の壯觀が出来たのであります。今の上野はその時の面影とは全然變つては居りますが、東叡山の境内を見ましても、徳川時代の佛教が忍ばれるのであります。

東本願寺も亦徳川時代の建立であります。曹洞宗の如きも又徳川の方によつて發達を捉されてゐるのであります。元來この曹洞宗は地方の武家に依つて榮へた宗旨でありまして、中心にはまづ淺い方

あります。然るに其の地方武士が徳川の影響に依つて大に發展した爲に曹洞宗にも到る處大建築物を見るに至り非常なる隆盛を來したたのであります。始め彼の臨濟宗と對抗して居た曹洞宗が其の發展の度に於て遙かに臨濟宗を凌駕したのは全く足利と徳川とが交替したことに依るのであります。

(五) 家康擁護の殿堂佛
教と僧侶の地位

是に於て徳川時代の佛教は決して退歩したとは言へないのであります。形式的即ち殿堂に於て大に進歩發展したことは何等疑ふべき餘地がないのであります。然しながら成程形式的には此の如き進歩を遂げたのであります。一面精神的には全く見る影もなき退歩であつたと云はねばなりません。上は大名より下は人民悉く僧侶の支配にあつた爲に僧侶の云ふことは天下何人と雖もこれを聞き容れぬ

と云ふことは出来なかつたのであります。一方から云ふと誠に有難い話であります。これが爲に精神的方面に於ては實に甚しい腐敗墮落を致したのであります。要するに徳川時代の佛教は後世にとつて喜ぶべき事も憂ふべきこともあつたのであります。退歩かと云ふに必ずしも退歩ではありませぬ。形式的に殿堂佛教が進歩したと云ふ事實があります。然らば進歩かと云ふに必ずしも進歩であるとも言へない、それは精神的方面に於て却つて大なる墮落を招いたからであります。

徳川時代に於ける佛教の大勢が此の如く成れる所以のものは家康が中心である事は無論であります。其の裏面に大に彼を助けて殿堂佛教を盛ならしめたものがあります。それは云ふまでもなく天海宋傳の二高僧であります。天海は内に宋傳は外に共に家康を助けて此の時代に於ける佛教の形式的方面を興隆せしめましたことは紛れも

ない事實として推賞するに餘りあることであります。

(六)

殿堂佛教の功勞者天

海並に宋傳の事蹟

凡てこの人間界のことは人間が支配せねばならぬと云ふことは當然であります。然し中々その爲すべき當然のことが容易に出来なものであります。兎に角人事百般の事さう急速に完成し得べきものではありません。何處までも漸進的に根氣よくやらなければならぬのであります。物事の成功は漸進的に根氣よく努力を續けて行く人の特權であると云つてよろしいのであります。

天海は實にその人であります。彼の漸進的不斷の努力はよく今日に到る迄彼の上野日光の壯觀を遺したのであります。彼は家康より四代に至る迄將軍に使はれたのであります。彼が將軍を使つたのであるか判らない程重疊がられて居りました。彼が日光山を引受けたのが

功事の成
漸進的なるべし

宋傳の家
綿密なる風

七十九歳の時家康公を葬つたのが八十三歳の時而して一切經を版にする等の事業を致しまして遂に百九歳にして圓寂したのであります。天海の一生は實に怠らず倦まず百九歳まで切り通したのであります。また宋傳は六十五歳の示寂であります。その代り彼の特色は物事を綿密にすると云ふことであります。本光國師の日記を讀むと宋傳は手紙を出すのに控を取らねば出さなかつた』と云ふことが書いてあります。

天海の漸進主義と宋傳の綿密主義とに基ける堅實なる働きのありましたからこそ、徳川佛教の精神的墮落を補ふに形式的殿堂佛教を以てすることが出来たのであります。

七 佛教の自力と他力

(一) 自力と他力との區別
は何れの點にありや

今假に佛教を大別して自力他力の二といたします。佛教の宗派が
どんなに多く岐れて居りましても、自力を以て論ずる時には各宗派凡
べて自力となり、又他力を以て論じまする時には、佛教全體が悉く他力
となるのであります。例へば彼の西洋の學者が宗教の定義を定むる
のに異論百出、殆んど底止する處を知らないといつたやうな次第であ
りまするが、苟も宗教たる以上は我々人間と神との關係を説くもので
あるとの定義に至つては、一致せるやに聞いて居りますが、今佛教もま
た各宗に分れて居りますけれども、佛教の二字を冠りました以上は、人
と佛との關係を説かない宗旨はないのであります。如何に他力の宗
派でありましても、機即ち我の方を全く捨つると云ふ宗派はなく、又如
何程自力の宗派でありましても、多少他力の意味を帯びないのはあり

ませぬ。

私共凡夫が轉じて佛様となるには、唯自力他力の關係より起るので
あります。これより次第にその所以を辨明して行かうと思ひます。

(二) 起信論に現はれたる
自力及び他力の信仰

佛教の經論には色々廣博なるものも種々ありまするけれども、今の
門外の人にして多く眼を晒らすは『大乘起信論』であらうと思ひます。
即ち此の起信論は、大乘佛教の全般を概括しました論で、是を禪宗よ
り見ますれば、禪宗は起信論より出づると見へ天台より云へば、天台は
起信論より出づると見ゆるのであります。諸宗何れも此の起信論よ
り出でし如く見ゆるは何故かと尋ねるに、此の論は馬鳴菩薩が無量の
經卷を此小冊子に縮められたが故であります。而して其の起信論は
最初に一心二門三大と組み立て、私共お互凡夫でありましても、最も

尊き眞如佛性を本來自然に具へて居ると云ふことを論じ後に馬鳴菩薩自ら十方微塵世界の有情は皆悉く眞如佛性を有してゐる故に甲が證すれば乙も證する理合でありまして證りの有無又は證に前後あるべき筈なし然るに證に有無あり又前後あるは如何なる譯なるやと問うて論師自ら是を答へてあります。

その答の意は、要するに自力他力と云ふにあるのであります。

その意義は、機即ち我々の方には佛性を有すけれども此の佛性は外界の刺戟を蒙らなければ發することはないのであります。其の外界よりの刺戟に善なる刺戟と惡なる刺戟との二つがあります。終る處佛法の大道理を私共に聞かひむる佛菩薩に會近するか果又會近する能はざるかに歸するのであります。其の惡しき刺戟に多く接する時は自ら惡に感化せらるゝのであります。例へば子弟を敎育いたしますにも、博士學士の智識を開發すべき能力を有

善惡二つの外來の刺戟

成佛とは因縁和合なり

するものでなかつたならば如何なる敎育を施すも決して其の者は博士學士となることは出來ませぬ。即ち敎育さへすれば智識を開發し得べき能力を有せなくてはなりません。是が即ち自力であります。然るに學校或は社會の他力を蒙ることがなかつたならば決して天賦の能力は發しはいたしませぬ。是れ即ち他力であります。

凡そ佛法に言ふ所の佛に成るといふ事は、言を換へて之を申しますと、因縁和合といふに歸するので、因縁和合と申しますは、即ち自力他力の謂ひで、自力他力とは、私共お互の策勵心、即ち善を好み勤むる心と又佛の方より種々に吾々を鼓舞し誘導したまふ力と、彼此感應道交する處を言つたものであります。

馬鳴菩薩は、此の感應道交の自力他力を以て成佛に前後遲速ある所を答辨せられました。又印度己來菩薩人師が一卷の書を著すにも最初に歸敬序を置くが通例となつて居ります。この意は、一卷の書を

已れが著して、一切の衆生我が論を能く信じて成佛の道を開きます。爲めに三寶の助力を仰ぐのでありまして、即ち是れ他力であります。斯く説き來れば諸君の中には、或は自因他果、他因自果は佛法の許さざる所正因果こそ佛法の大道理である。佛のなしたる修行の功を以て衆生の功德となすと云ふことは、他因自果であると詰難する方もありますから、今少しくお話し申しますれば、其の自因自果自作自受の中に於いて、他因自果が行はれますのであります。

佛法の十善戒は、今私が贅辭を弄するまでもなく、其の樞要なることは既に諸君の知る所でありませうが、然るに時としては、殺生と、偷盜も許すことがあります。夫は決して今私が構造の言ではありませぬ。梵網經等に於いて明かに出て居ります。今若しも我國と他國とが交渉の談判が破裂しまして、彼より銃砲を向くるに際しまして、我は佛法である人を殺すは佛の禁する所であると固執して動かなかつたなら

ば、我國は一撃の下に彼等の爲に蹂躪されて仕舞ひます。故に斯く一方に偏するは宜しくありませぬ。又追善供養の如きも、果して自因自果でありまして、如何なる場合にも、此の法規を犯す事が出来ないとしたならば、先きに死んだ人の爲に追善供養するの必要がなく、又假令ひ追善をなし、供養を行ふと雖も、其の功のある理はありませぬ。是れ自因自果自作自受の嚴規の中に自然に他因自果の理を含むのであります。

(三) 一切佛教に於いて他力を離れたる物なし

大乘佛教は多く一味平等の邊で説を立てますが、法相宗は之に反して、差別の邊で佛法の規則を立てました宗旨でありますから、佛は佛にして衆生にあらす、衆生は衆生にして佛にあらす」と、何處迄も差別を本とするのであります。然るにこの何處迄も差別を本とする法相

佛教人生觀
宗にも尙他力を説いてあります。夫は追善供養のことでありまして
祖先父母の恩を思ふて善い事を行ひ、その己れが務めたる功德が轉じて
祖先父母に向ふと云ふことが、歴々と説いてあります。此の説は即ち
自作他受であります。

彼の規則を變ずるは何故であるかと云ふに法相宗の開山は此の事
を解釋して居られます。今それを簡約に申しますれば、全體通常ではこ
の變則はありませぬ。然るに其の無き變則が時に在ると云ふには三
つの事情があります。

其の第一は、我名聞心より務めたる事でありますれば、何の功益もな
い只祖先父母の恩に感泣して身心の念願より追善すれば、其の功德が
祖先父母に向ふので、是を施主の念願力と申します。

第二に佛は常に何か縁を求めて、一切衆生の苦を抜きたいといふ慈
愛心の満ち玉うたるお方であります。故に人ありて追善すれば

大いによろこびましまして、その念願に従ひ祖先父母に其の功德を轉
じ授けるので、是を佛の悲願力と申します。

第三に此の二事情がありましても、法の功德力がありませぬ時は、何
の功もない法の功德力とは己の修し行ひたる法の功德力で、即ちこの
功德が入用であります。しかし是の三事情にては尙ほ足らざるを覺
へます。是を補はんとするには、須らく實大乘幽妙の理を研究なされ
ましたならば、其の不足の理は明々として満ち來る様になることと思
ひます。斯く法相宗の如き差別の上に差別をつくる宗旨でありま
すれば他力など云ふことは夢にも語らざる筈でありますのに、何ぞ
計らん其の宗にして他力廻向を歴々と説いてをります。而して斯の
如く通常の凡愚の追善にても、他力廻向が到達することでありませぬ。
況んや一切智圓滿の佛陀に於かせられては尙更らることでありませぬ。
全體佛は常に遊んで居るものではありませぬ。佛は大事業家であり

ます。其の事業は釋尊は涅槃經の中に五の事業と御説きなされて居ります。其の中にも第一第二が最も大切でありまして第一は病行第二は嬰兒行であります。

病行と言ふは例へば私共が殺生偷盜邪淫等をするは是れ精神の病氣で是等の行は人間より等級の下りたる行であります。故にこれを病行と申します。然るに佛がこの病行を實行することがあります。

次に嬰兒行とは人間普通の徳義倫常等のことでありまして佛教にて所謂五戒十善等の徳義でありますが大乗の眼より見ますれば是を小兒の行となす例へば小學校を大學校の人より見れば小兒の行と見るが如く又一攫千金の商法家は五十圓乃至百圓の商人を見て小兒の行とする今も是と同じ理であります。佛も亦其の嬰兒行を實行することがあるのです。即ち私共が人間己下の惡人になつて居るときは佛も是と同じく人間己下の病行となす。虎穴に入らざれば

虎の兒を得ずの理でありまして素より惡に固執してこれに染まつて居る者に向つて頭から善事をなせと命ずるも寸分の功益もありませぬ。私共は無始以來惡に固執せるものなるが故にこの時には佛は十惡五逆を自ら行じて其の者を漸々に善道に導く様にいたします。

又嬰兒行は例へば今茲に六十歳若しくは七十歳の老婆があらまして翹をつき羽子を弄び子守唄を唄へば其の事情を知らない者は狂人の所爲とするであります。然れどもこれは決して狂人ではなくして小供の守りをなすが爲に老婆自ら小供に成つて小兒の心を慰むるのであります。是れ即ち老婆の慈悲心であります。釋尊は經に多く忠孝を御説きなされてあります。其の證據には華嚴宗の祖師宗密禪師の孟蘭盆經新疏を見ましても初めに、

「大孝釋尊累劫報親恩成正覺」とあるが如き是れ即ち釋尊の嬰兒行で既に釋尊は大悟徹底なされてある故に人天の行は小兒の行の如くそ

佛敎人生觀

の天行を行じ玉ひるは即ち嬰兒行といふものであります。世間或は我心即佛なり即心成佛なり即心是佛なりなど、高尚なる識見を立つるものあるは是れ即ち佛の他方にて斯く高尚なる識見を立つるに至つたのであります。何故ならば佛法の規則といたしまして宿善なければ佛法に遇ふことは叶はぬのであります。而して苟も是佛の見識を立てるほどの宿善は之を遠く尋ねれば佛の病行嬰兒行の他方で得たる宿善なのであります。されば一切の佛敎は何れも他方を離れないのである事を忘れてはなりません。

八 宗教の歸趣

(一) 宗教は知識の及ばない所に存在す

宗教の問題は個人對宇宙であります。宇宙の無限なるに比すれば

個人は極めて微少なるものであります。此の世界は時間的にも又空間的にも無限なるものであります。吾人はこの無限なる世界の中に小さい生命を得て生存してゐるのであります。この偉大なる世界に對して不安の感じの生ずる處からして何か雜乎とした精神上のある依り處を持ちたいと云ふ心持ちが起つて來るのであります。此の世界には人間の智識の及ばない處があつて然も其れは始終開拓せられ

てはゆくけれ共知るべきものは無限で極まる處がありません。其の無限のものを知り盡すと云ふことは到底不可能の事でありま

佛教人生觀

に對する人間の力の餘りに弱い事を感じて茲に驚異不安の念が起り、何か依り處を欲する。そこへ偉人が出世して斯くす可しと教へを説くのが即ち既成宗教であるのであります。

又或る人は智識は宗教に何の關係もないものゝ様に云ふけれども、其れは大なる間違であります。智識の及ばぬ處に宗教は存在します。これ共此點に於て學術の發達と共に宗教も變化するのであります。人智の開けぬ時は分らぬ事が多いので速信が極めて多くありました。例が學問の發達によつて漸々此等の迷信は霧散してしまひました。例せば地震は魚が地中で動くのだとは維新前後までは一般に信じられて居たことであります。又雷は太鼓を叩いて雲の上を走るのだと信せられて居ました。すべてこんな簡單な説明で満足して居るのも古い事ではありません。然るに現今に於ては學術を以て一切を説明する様になりました然しながら茲に超自然と云ふ事があります。即ち

自然を超越した範圍があります。この範圍の事に付ては種々の迷信が起るのであります。自然のことを説明するのは荒唐無稽のことであります。超自然の處には迷信が起り易いのであります。こゝには自然の法則で説明する事の出来ない色々な事柄が澤山あります。だからと云つて超自然が決してゐるとは云はれませぬ。

此の超自然を二大別することが出来ます。自然そのものに就いて超自然の考へが起ります。一例を云ひますれば自然の終局の目的發生進化の目的を考へますと自然に就いて自然以上のものを考へます。之は迷信ではありませぬ。世界に於てなす可き人間の目的を考へて見ますると自然以上に自然を超越したことを考へるやうになるのであります。

(二) 宗教と情意の世界との關係

人生と超自然といふことがあります。それは宗教に關係のあることとであります。何處に人生の目的があると云ふことは大に關係があることとあります。而して智識以外に宗教に關係するものは情意であります。智識の側でどんなに批評して宗教の性質を分解して見ましても情の側に於て満足し得ぬことがあります。此の情が社會人生に於て不安でならぬことがありますと何とかして情の満足を得る様な方法を求めるやうになります其の道具立てが即ち宗教であります。その満足を得る爲めに社會には仕掛けがしてあります。例へば人の死骸などは理論の上から云ふときは何處に捨てゝも好い筈であります。昔はそうしたものださうです。現に人喰人種中には父母の死骸を食して殊に他人に喰べさせるのは惜しいと云つて家内で食ふと云ふこととあります。併し兩親の死骸を鳥獸に任するは情に於て忍ぶことは出来ません。況んや之を喰ふに於てをやであります。

情意の満足と宗教

懷疑心に満足するに足る法を興

情意の満足をする仕掛は發達して宗教儀式となつたのであります。茲に注意すべきは、ある少數の人は哲學を研究し哲學で満足することが出来ると云ふものがあります。併し元來哲學は智識で研究して人生を明にするものであります。たゞ自分の考へで満足して行けばよいが仲々満足が出来ないものである。満足をするやうに努力はするが考へが纏まらぬものであります。そこに懷疑が起る。懷疑は懷疑を産んで遂に満足し得ぬこととなり、ます。哲學者と云ふものは少數で、多數は哲學を知らないものであります。それであるからして精神界の大偉人の開いた教で、以て精神の不安を救ひ満足を得るのです。

(三) 人と禽獸との相違點
は何處にありや

宗教は一面に斯う云ふ風に考へたらよいでありませう。一個人の場合に於ては宗教は個人對宇宙から起るが、それは智識の上からのみ見

佛教人生觀

すして人生の働きの上から見るのがよいのであります。社會で活動し
進歩せんとしたなら自由でありますが人間としての目的を達するに
は社會的關係世界的關係があつて何事でも自由に行つてよいとは云
へませぬ。人間は人間として發達するやうにある方針をとつて進まね
ばなりません。人間には自然に要求があります。此慾の爲めに種々の面
倒が起つて馬鹿を見るのであります。多くの人は獸類等と同様にこの
欲求の爲めに打ち負けるのであります。どうか考へて見ても人間は獸
類と同列にあつたものが段々と進化して今日の人間對動物と云ふ關
係になつたものとしか考へられませぬ。
萬物の靈長としての特長は尠くとも人間性と云ふ他の動物にない
性格を有するものであります。併し人間となつても依然として動物
にあつた時の欲があります。人間性とはこの欲に支配せられずに進ん
で欲を支配する理性の力であり、若し肉體の欲の向つてゆく儘に

進んでゆくとしたならば人間も獸類も異なる處はないのであります。
然るに吾人人間たる所以は精神力のある事で、之が全身を自由に動
かし、之が肉體を制御して人間の理想に向つて進ましめる處に存する
のであります。肉欲により精神を支配されるか、精神力に依つて肉欲
を支配するか、人間と動物との分岐點であります。此の肉欲を制し
て行かうと努力する處に人間の尊さがあるのであります。その働きの
力を與へ自己の肉體を律し、而して人間最高の理想に向つて進まんと
する處に宗教的意義が存するのであります。この肉欲に勝つのが眞
の人間の勝利でありまして、道徳的に是に打ち勝つ、その道徳の命する
ところに宗教があるのであります。これが超自然の目的に達せんとす
る微妙なる働きであります。この欲も年齢に従つて變化してゆくも
のであると孔子も説いて居ります。而し變化はするけれども欲の盡
きると云ふことはありません。人間は我欲の塊であります。然るに俗

暗黒なる
裏面に
事象を
探すべき

佛敎人生觀
人の欲の羈絆を断ち切つて何んの欲もない立場から人生を見るのは
偉人でありませぬ。凡人はこの欲に支配されて不知不識の中に一生を
終るのであります。即ち憐むべき醒生夢死をなすものであります。こ
れが爲めに人間のあらゆる災難が起つて來るのであります。表面上
丈が事實でも大したものでもありませんのに、暗黒なる裏面には如何に戦
慄すべき事實が伏在して居るか知れませぬ。この恐る可き人生に處
して運命と云ふ逆浪の爲に支配されて幾多の苦しい經驗を嘗めさせら
れるに従つて不幸なる人生を呪ふ聲も起つてまゐります。それ共仕方
はありません。茲に於きまして宗教が起つて來るのであります。

(四) 人間としての最
高の目的は何か

人間は断えず情欲に支配されるものであります。其の中から肉欲を
制御してゆく必要が有ります。これ宗教の敎への必要なる所以であり

情慾撲滅
制裁が必
要なり

ます。この本能的發作の肉欲を防ぐことは仲々の難儀の事でありまし
て之れに依つて墮落も向上もあるものであります。この肉欲を完全に
防ぎ得た人を之れを佛と云ふのであります。普通人には困難なことで
あります。而し出來るだけ律してゆかなくてはなりません。

出來る丈け之に打ち勝つて進化し次第に精神的に向上して行
くと云ふことが大切であります。情慾の撲滅と云ふことは六ヶ敷いが
或る範圍内に制してゆくことは出來るのであります。之れは是非とも
宗教的方面から制してゆく可きことであります。而してこの宗教は時
代の人に應じてゆく宗教を必要とするのであります。

元來人間には善に向つて進まんとする人と又之れに反して惡に接
近せんとする人の二種類があります。前者は宗教的人々でありま
すが、後者は非宗教的人々とも申しましう。進化の方面から申しま
すれば優勝劣敗不良人種の滅亡は當然のことであるかのやうに考へ

られますけれども事實に於ては左様に一概には云はれませぬ。人種の最後の勝利は優美なる感情を有する人種に歸するのであります。種々の不幸者に對する救濟事業感化事業の如きは獨り人間が情意の満足を得るのみではなく民族が感情的に發達してゆく所以であります。人間最後の目的は決して腕力ではありませぬ。

今の歐洲戰爭は私は宗教の衰退に起因するものであると思ひます。彼の舊約全書の四大豫言書が猶太人に對つて豫言したことが恰度今日の歐洲戰亂前の状態に當て嵌まるのであります。

基督は隣人を愛せよ敵を愛せよと教へて居ります。然るに今となつて何處に隣人を愛し敵を愛する主義が行はれて居ります。多くの人は眞の信仰を地に委した之れを彼れ基督の側から云へば神罰であると云ふも敢て過言ではありません。併しながら生存競争の一形式は戰爭であります。競争は進化を増し進化ある限りは戰爭は止まぬのであ

ります。戰爭の已むと云ふ可能性は社會にないと云ひ得ることであり、故に軍備は少しも怠たつてはなりません。軍備は平和の保證であります。自國の軍備によつて平和を確證するが如きはこの上乘なるものであります。

(五) 宇宙人生の畢竟究
極的歸結は何か

元來人間は戰爭が目的ではありません。平和的に發展しつゝ、個人の人格を完成して文明に導くのが人間の最高の目的であると云ふ事は言を待たない事であり、而して宇宙人生また宗教の歸趣も此處にあらねばならないのです。人格の完成とは第一には智識の増進で、第二には趣味の向上で、第三には意志の鍛練であります。處が此の知情意の三者の綜合調和は宗教的信念によつて期する事が出来るのであります。すから宗教の歸趣も畢竟するに人生の目的と一致するのであります。

幾度かおもひさだめて變らむ

たのむまじきは我がこゝろなり
上來累々數千言修養篇より學術篇に至る五篇四十節何れも皆わが頼
むまじき心を向上伸展せしめて堂々完全なるものたらしむるにある
のであります諸君私の以上の言を取つて以て諸君が心の資料とせら
れたならば獨り私自身の喜悅のみではありませぬ。

總附結

佛教人生觀〔終〕

大正六年五月廿五日印刷
大正六年六月一日發行

(佛教人生觀與付)

定價金壹圓七拾錢

著者 南條文雄

發行者 石田彦三郎
東京市本郷區元町二丁目廿二番地

印刷者 安田徳治郎
東京市神田區表神保町一番地

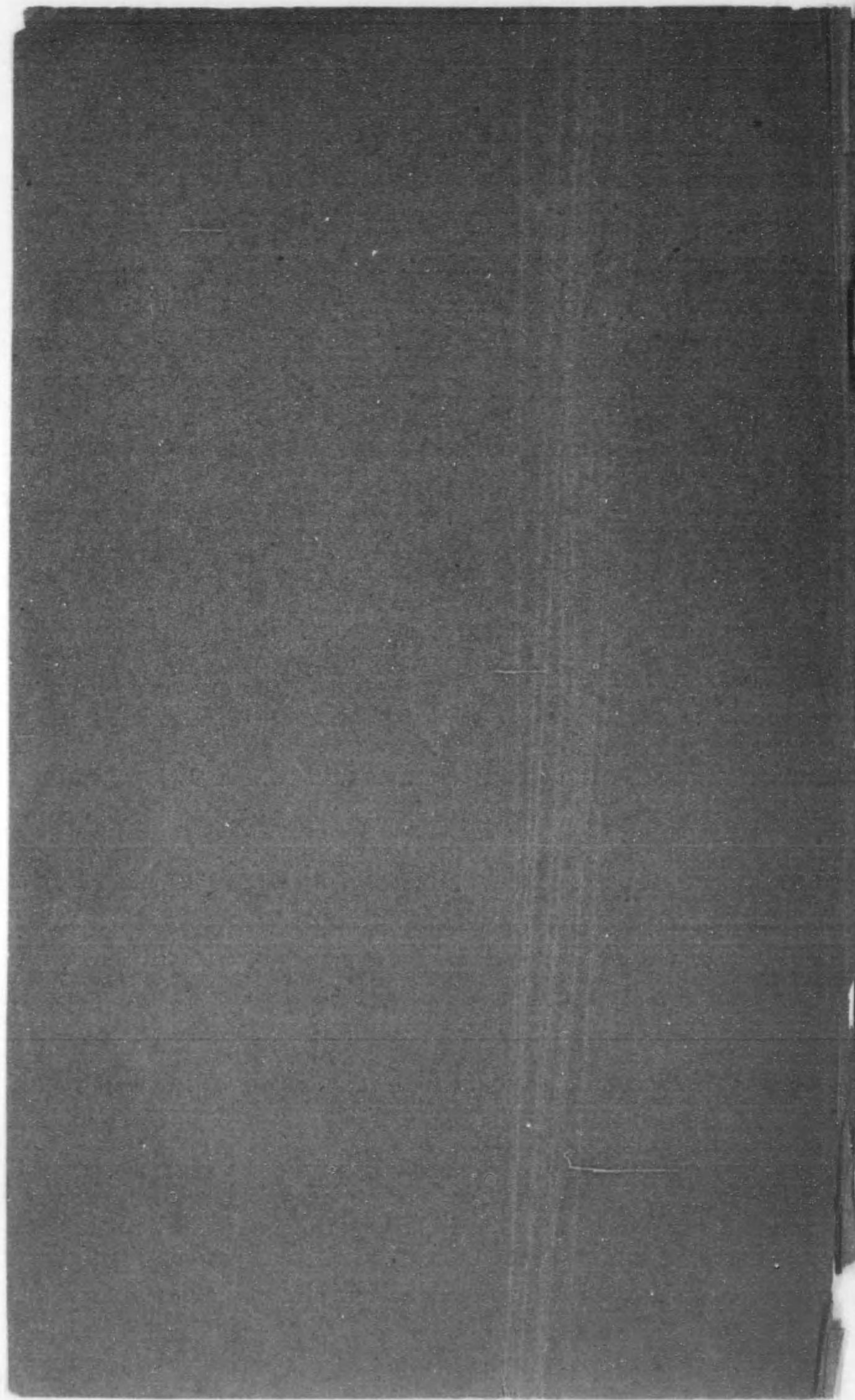
印刷所 健捷堂印刷所
東京市神田區表神保町一番地

不許
複製

發行所

東京市本郷區元町貳丁目廿二番地
振替口座東京壺五七八〇番

中央出版社



324
127

12.1.19

終